

特集「高度な対話による先進的な教育・学習システム」の 掲載にあたって

近藤 伸彦

(東京都立大学, 学会誌編集委員会幹事)

1. はじめに

CAI学会として1974年に設立された本学会は、1995年の教育システム情報学会への改称を経て、2024年に設立50周年を迎えた。本学会のはじまりがCAIをその中心においていたことから明らかなように、CAIやITSにおける対話システムをはじめとして、「人と機械の対話(やインタラクション)」あるいは「機械による対話の促進」などの観点による教育・学習システムは、本学会において設立当初から深い関心を集めてきたテーマであるといえる。

このような教育・学習システムにおける「対話」の観点を語るうえで欠かせない存在になったのが、いわゆる生成AIであろう。2022年末のChatGPTのリリースを皮切りに、大規模言語モデルに代表される生成AIは、自然言語を介した「対話型」のAIシステムとして加速度的な発展をみせており、あらゆる分野、領域に対して、きわめて大きくかつ不可逆的なインパクトを与えつつある。もちろん本分野においてもこれは例外ではなく、教育・学習支援システムの構築や、教育実践のデザインを検討するうえで、いまや生成AIは無視できない位置を占めているといえるだろう。

その一方で、教育・学習という営みにおいて、学習者と教授者、学習者同士などによるさまざまな形での(人間同士の)「対話」は、授業設計、学習支援、その他さまざまな教育・学習のデザインにおいて、その効果を高めるための重要な要素として扱われ、本分野においても、これに関するさまざまな研究や実践的知見が蓄積されてきたものと思われる。またこれに加え、教育実践者と研究者の対話のように、研究方法論としての「対話」の重要性も、本分野における理論と実践の往還を実質的なものとするために欠かせない視点である。

これらを踏まえ、本特集では、広い意味での「対話」をキーワードとし、「高度な対話による先進的な教育・学習システム」をテーマに掲げることとした。本テーマでは、教育・学習の場における「高度な対

話」をできる限り広く捉え、対話型生成AIの教育・学習への先進的な活用・実践をはじめ、対話に基づく教育・学習システムや学習環境の構築あるいはその教育実践に至るまで、高度な対話に基づく教育・学習システムの発展にまつわる論文を幅広く対象とした。

編集委員会では、本学会設立50周年を記念した2024年の全国大会において、同名のテーマによる企画セッションを実施し、4件の発表が行われた。このテーマは後述する特集論文研究会に引き継がれ、16件の発表が行われた。これらの発表のすべてが特集論文として投稿されたわけではないが、本テーマに呼応した研究の多様さや面白さ、そして重要性を感じていただけるものとなっているので、機会があればぜひこれらの発表原稿についてもお目通しいただきたい。

以下では、本特集の投稿から審査にわたるプロセスについて、その概略をお示しする。本特集のプロセスの記録をご参照いただいたうえで、ぜひ今後の特集におけるご自身の発表や投稿にもご活用いただきたい。

2. 論文の投稿数と判定結果

本特集論文の投稿締切は、当初の2025年6月1日から、6月15日へ2週間の延長を行った。最終的に12編の投稿を受け付けたのち、1編の取り下げがあり、残る11編(一般論文6編、実践論文2編、ショートノート3編)の審査を行った。ここ2年の投稿数はいずれも13編であり、若干の減少はあったものの、およそ同水準であった。

論文審査にあたっては、査読に基づく採録可否の判定とともに、特集テーマとの整合性についても厳正に審査を行った。その結果、採録は4編(一般論文3編、実践論文1編)となり、いずれも特集としての採録となった。なお、採録率は36.4%(採録4編/審査数11編)であった。ここ数年の採録率は30~40%前後で推移しており、およそ同水準の採録率であったといえる。